

優秀賞（岩手県知事賞）

水に感謝し、自然と共に生きること

盛岡市立飯岡中学校

二年 浅沼 あさぬま 香子 こうこ

私の家には地下水と水道水の二つがあり、地下水は飲み水として、水道水は洗い物などをするときに使用していた。地下水はともきれいで、真夏でも真冬でも冷たい。特に夏の炎天下、外からバテバテになりながらも帰り、くらいつくように飲む水は最高としか言えない。体の隅々にまで、滝のように水が流れて行く感じがするのだ。

水がもしなくなってしまうたら人類は生きてはいけない。のどから手が出るほど欲しくても、くらいつくように飲みたくても・・・。

日本では、どこの家でも蛇口をひねれば水が出てくる。毎日、毎日、お風呂にも入れるし、飲みたい時に水を飲むことができる。水はいつでも使えて当たり前

の社会なのだ。

しかし、それが当たり前だと信じ込んで良いのだろうか。確かに日本は水はいつでも使うことができる。ところが、世界には水道の設備が整っていない国がたくさんある。また、たとえ水があっても、その水が安全だとは限らない。水が飲めずに命を落としてしまう人達もいる。

日本ではこのようなことは考えられないし、想像も出来ない。蛇口をひねれば、安全できれいな水が出てくるというのは、とても幸せなことであると思う。

私の家の近くには、大きな水路や田んぼがたくさんある。暑い日には用水路の水に足を入れて「冷たくて気持ちが良いねー」と、よく祖母と言っていた。ある日、私は久しぶりにあの用水路の横を通った。何げなく顔を向けると、ペットボトルやプラスチックの容器などが木の枝に引っかかっていた。その上、用水路の底は黒ずみ、よどんでいた。私はこの光景に唖然とした。人間の手であのきれいな水を汚してしまったの

だ。胸が痛んだ。地下水はきれいで、おいしいと言っていた私の家も、もう、地下水は使っていない。原因は地下の水が汚れてきて、百パーセント安全に飲めるという保証がないからだ。今や我家では水道水は生活用水へと変化した。

私は自然が汚されていくことが残念でならない。自然は、水は、生きていくためには無くてはならないものなのに・・・それを破壊しているのは人間だ。

私はこのまま日本の水が汚れていってしまったらどうなってしまうのだろうと思った。そこで、日常の小さなことから始めようと節水を心掛けた。

でも、そんな私でも、ふと忘れてしまうことがある。常に意識して生活するのは大変だけど、それが一番大切なことだと思う。

そこで私は、毎日の生活の中で出来ることはないかと考えてみた。その結果、食器を洗う時に出しっぱなしにしてしまう水、お風呂からあふれ出てしまう水から節水しようと思った。今まで、食器を洗うときにい

ちいち止めるのは面倒くさいと思っていただけ、この小さなことでも、だいぶ節水になる。お風呂はいつもあふれてしまうほど入れていた。それで入れる当然大量のお湯が無駄になる。そこで、入れる量を減らし、もし多い場合は、洗面器やバケツにお湯を移した。兄弟たちも今では心置きなくこの方法を実践している。

このようなちよつとした工夫や努力が、水を大切に、自然と共に生きていくということに繋がるのではないだろうか。日本のように水の設備が整い、安全な水がいつでも当たり前のように飲める国では、水の大切さやありがたさを意識されることはない。でも一人一人が毎日の生活の中で実行していくことによって、水をもっときれいに、大切にしていけることが出来ると思う。私は、改めてこの恵まれた環境に心を込めて感謝したい。そしていつの日か、私の大好きな地下水がまた飲めるようになるのを信じ、待っていたい。

(注) 原文のまま浄書しています

優秀賞（岩手県知事賞）

水資源を守る

盛岡市立飯岡中学校

二年 熊谷 くまがい 歩美 あゆみ

私の家は箱ヶ森という山が近くにあり、周りには一面に田んぼが広がり、安全のためにコンクリートで固められた川があります。市街地に比べると自然がたくさんあり、川には魚も住み、この自然に囲まれた飯岡が私はとても好きです。

しかし、先日、祖父から昔の様子について話を聞く機会がありました。今年六十九歳になる祖父が幼い頃には、コンクリートで護岸工事をしてある川は一つもなく、春先、暖かくなるとザルや「はきご」という田植えの時などに腰にくくりつけて使う竹で編まれた深いカゴを使って、川の中をさらって、ドジョウやザリガニ、アカハラというトカゲなどの生き物を獲り、遊んでいたそうです。そして初夏になると、田んぼや川

の周りを今よりもたくさんホタルが飛びかっていたそうです。

子供だった祖父にとっては、周りの田んぼや小川は楽しい遊び場でしたが、整備されていない田んぼは農作業をするうえでとても効率が悪く、田植えの時期に田んぼに水を引くのも大変な作業だったと言います。

昭和三十年頃から、小さな田んぼをつぶして大きな一枚の田んぼにすることが行われるようになりました。それに併せて小川からまっすぐ田んぼに水を入れられるよう、コンクリートで固めて整備する工事があちらこちらで行われました。そのおかげで、田んぼに水を引き入れる「水口（みなくち）」という所に備え付けられたバルブをひねるだけで水を入れられるようになりました。大きく広くなった田んぼでは大型の機械を使えるようになり、作業効率は大幅に改善され、米の収穫量も数段に増えました。農業を営んでいる祖父たちにとってはとても有効な工事でした。

しかし、その結果、川はコンクリートで固められ、

その川に住む小さな生き物の大半は姿を消してしまいました。私は幼い頃は昆虫や植物をとり遊び、今もどちらかと言えば外で遊ぶことが多いので、祖父が幼かった時代をとてもうらやましく思いました。

現在の私の家の周りの田んぼや小川のある自然豊かな風景は、農業を営んでいくうえで、先人たちが苦勞しつくり上げてきた風景だと思います。

農業を近代化し、発展させるためには自然環境に手を加えなければならなかった。でも今、自然を壊すからと言って昔の農業に戻すこともできないと私は思います。豊かな水田をつくり、整備、維持して行くことは、周囲の水環境にも心を配り、荒らして壊してしまわないよう考え努力しようとするきっかけの一つになると私は考えます。

私は自然の中に住む魚やホタルなどの生き物が好きです。それは自然環境にとってもとても大切な存在だと思います。今日まで私たちは、利便さ、快適さを一番に求めてしまい、未来へと渡す本当に必要な物を見

落としてきてしまったように感じます。

水資源を人間だけの都合で汚し、荒らしてしまうのは、決してあってはならないことだと私は強く思っています。

これからの私たちは、人にも生き物にも快適な水環境を整えて行くことが大切な課題だと思います。自然や小さな生き物にも心を寄せ、水資源を守り、お互いの生活を豊かにし、上手に共存し合えるような社会を築く努力を絶やさずに続けて行かなければならないと思います。

(注) 原文のまま浄書しています

優秀賞（岩手県知事賞）

使い分けの知恵に学ぶ

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 佐藤 暢さとう のん

シャツ。シャツ。水がじわじわと広がっていく。アスファルトが黒く染まっていくのをじっと眺める。自分の足元に流れてきた水がサンダルを濡らしそうになって、慌ててかかとを後ろに下げる。そんなことを繰り返していると、ふとした拍子につまずいて、すてん、と尻餅をつく。それを見て祖母が楽しそうに笑う。小学校に入学したばかりの夏には、じょうろを持って駆け回った幼い頃の私のことを、祖父がよく話してくれる。地面に打ち水をすると涼しくなると絵本で読んで、それを真似ると、自分も絵本の登場人物になったような気がして嬉しかったことを、今でもよく覚えている。

つい最近知ったことなのだから、アスファルトの道路

に打ち水をして、期待できる効果は小さいという。それを私に教えてくれたのは大叔父だった。彼は山の麓に住んでいる。栗の木に囲まれた自然豊かな閑静なところだ。彼は木々の間に開けた一か所を指差して、こう言った。「見てごらん。水が湧き出ているだろう。あれを打ち水に利用するんだ。あの水は浄化しないと飲むことができないから、使い分けるんだよ。」そして、アスファルトに打ち水を行っても水があまり染み込まないから、保水力の高い土に行くべきなんだよ、と続けた。なるほど、よく見てみると、湧き出ている水はすこしばかり濁っていた。彼の話聞いていて、なんだか引っかかる言葉があった。「使い分ける」とはどういうことだろう。

蛇口を捻れば水が出る。当たり前のことだ。私になにもしなくても、出てきた水は飲むことができる。家の中のどの蛇口を捻っても、みな同じように水が出てくる。私の知っている水はどれも透明で、どれも同じだ。だから、「使い分ける」と言われても、すぐにはピ

ンとこなかった。水を使い分けるとはどういうことなのだろうか。いつ、どのように使い分ければよいのだろうか。

少し考えてみたら意外に身近なところに答えがあった。洗濯だ。我が家では、洗濯の時に風呂の残り湯を再利用する。浴槽の中の水にポンプを入れ、その水を洗濯機に送って衣服を洗う。残り湯を利用すると、汚れが落ちやすいと言われているからだ。しかし、すすぎの場合は、蛇口から出るきれいな水をそのまま使う。他にもある。きれいな水で米を研ぎ、その研ぎ汁を植物の水やりに利用する。研ぎ汁には多くの栄養分が含まれていて、植物の生育に必要な養分も含まれている。もしかしたら、私が気付かなかっただけで、実際はもっと多くの水の使い分けがされているのではないだろうか。

ところで、今から四〇〇年ほど前の江戸の町では、様々なもののリサイクルがされていたという。もちろん、使い分けによるリサイクルもある。例えば、大人

用の着物を古着屋で買ったとする。古くなれば使える部分で子ども用の着物に作り直す。再利用できない部分や作り直す際に出る端切れは端切れ屋が買ってくれる。端切れ屋は、回収した端切れをつなぎ合わせて布団などを作っていた。このように、布を再利用できる部分と再利用できない部分とで使い分けていたそうのだ。

このことは、水の使い分けにも当てはまるのではないだろうか。水を使い分けるといえることは、「再利用できる水とその使い道を考える」ということに言い換えることができるからだ。水を使うとき、蛇口を捻る前にその手を一度止めて考えてみよう。本当に蛇口の水が必要か、一度ほかのことに利用した水の再利用でもよいのではないか。水の使い分けは、節水にもつながる。一人一人が水の使い分けに対する高い意識を持ち、実行に移すことこそが、水の有効活用において最も大切なことだと私は思う。江戸の町の知恵を、現代に生かしてみたい。

(注) 原文のまま浄書しています

優秀賞（岩手県知事賞）

環境を守る水

宮古市立重茂中学校

三年 前川 まえかわ 静香 しずか

私が住む重茂では、きれいな海を守るために合成洗剤を使わない取り組みが行われている。水産資源が豊富な今の重茂があるのは、この取り組みのおかげだ。現在に至るまでには、さまざまな苦労があったと聞いている。合成洗剤の使用により海が汚れ、水産資源にも影響を与えたらしいのだ。そこで、重茂の婦人会の方々が、重茂地区の商店の合成洗剤を買い取り、その代わりに「わかしお」という洗剤を置いてもらえるように頼んだのだ。この洗剤は、自然に優しい。もちろん海への害がないのだ。

こうした取り組みもあり、この洗剤を使うようになったことで、重茂の海は、ウニやわかめなどの海産物が豊富にとれる海へと変化したのだ。ここまで来るに

は、多くの方々の努力があったのである。

これから、未来を担っていく私たちも、この海を守り続けていかなければならない。そのためには、私たちが重茂の環境に対して責任を持ち、さらに良い環境を創っていかなくてはならないのだ。きれいな水や海を守っていくためには、山や森をきれいに保つことも必要だと思う。そのために、私たちも重茂漁協の婦人会の方々のように、しっかりとした目的を持ち、自分たちの思ったことを行動に移していかなければいけないと思う。

原子力発電所の放射性物質が海に流れ出たというニュースを耳にしたりする。私たち人間の生活を豊かにするために開発したものが私たちの生活を脅かすものになっているのである。今以上のきれいで豊かな海を目指すなら、地域を挙げてより効果的な取り組みを進めていかななくてはならないだろう。

しかし、より快適な生活を営むために開発は止めることはできない。開発と環境を守ることの両立は、相

当な苦勞を伴うであろう。難しいことではあるが、私たちはそれを実行していかなくてはいけないのだ。

人々の生活は豊かになり、何でも欲しいものが手に入る。以前には環境改善の取り組みがなされたのだが、私たちの生活スタイルの変化で、重茂でも環境が少しずつ悪化している気がする。このまま悪化の方向へ進めば、重茂の財産である、きれいな海や豊富な海産物、豊かな森が失われてしまうだろう。このままではいけないと思う。豊かな森がきれいな水を作り、それが海へと流れ、海をより豊かにしてくれる。豊かな水産資源によって、私たちの生活が成り立っていることを忘れてはいけないのである。

しかし、昔のことが少しずつ忘れ去られていっていき、そのような気がする。合成洗剤を使わない運動があったにもかかわらず、現在は、「わかしお」を使っている家庭もあるが、合成洗剤を使っている家庭もあるようだ。もし、このまま環境に対する意識が薄れていくと、どんどん環境は悪くなる。水はどんどん人間によって汚

染されていってしまう。これをくい止めなければならぬ。くい止めなければならぬと思いつつ、なかなか行動にうつせない。人間のしたことを止めることができるのは人間だけなのである。止められなくなる前に、止めなければならぬ。そのことは、これから私たちが長い時間をかけて取り組んでいかなければならない課題だと思う。少しずつ、できることをやっていけば、いつかきつと今よりもよい環境にできる日が来るであろう。その日を目指して、今からほんの小さなことでも、一人ひとりが始めていけば、いずれ大きな成果を得ることができるよう。まずは、自分から始めていこう。今よりも豊かな自然になる日を信じて。そして未来のために。

(注) 原文のまま浄書しています

優秀賞（岩手県知事賞）

大切な水

花巻市立花巻北中学校

一年 吉田 よしだ 桜 さくら

私は、水を飲んだ。それは、学校の周りをグルグルと何周も走った後だったので、とてもおいしく感じられた。蛇口からでるその水は、当たり前だが透き通った水だった。

私が小学四年生のとき、高田万寺浄水場に社会科見学に行った。今でも記憶に強くインプットされているのは、人が安全に水を飲めるように先に魚の水槽にそれを入れていくこと。そして、外で見た時の水と途中でろ過された水とのちがいだった。こんなに変わるなんてすごいなあと思った。そしてこの水は大量の薬を使ってきれいにしていくことも勉強していくうちに分かった。だから蛇口から出るあの水はあんなに透き通っているんだなと思った。しかし、水がなくなっ

まえばすべては終わりなのだ。

私がだれからか聞いた話によると、人の体の中の水分は約六十五パーセントだという。それが何パーセントも下がると体調が悪くなるのだそう。だから水分補給は大事だと耳にたこができるほど言われたのだ。

しかし、さっきも言ったように水がなくなってしまうえばすべては終わりなのだ。もし、それがなくなったらどうしよう。トイレの水は流せないし、お風呂にも入れない。第一水分補給ができない。それは防ぎたい。いや、防がなければならぬのだ。もう水不足は各地でおこっていて、ダムの水の量もへったりしているのだから。

私はあるテレビ番組でそれを見なければ、このことを知らなかった。三年生まで、飲み水は「無限だ」と思っていた。四年生になって初めて、「無限」ではないことを知った。でも、私はあと何百万年、いや何千万年以上確実に飲み水はあると思っていた。なぜかという

と、世界には大きな海が沢山あるからだだった。しかし、私の考えはまちがっていた。海の水は、飲み水ではないのだ。よくこの地球は「水の惑星」と呼ばれるが、飲める水ではないので、「海水の惑星」と呼んだ方が良いのではないかと思った私だった。

飲み水は年々少なくなっているだろう。では水を少なくさせる原因は何なのか。その一つが水を汚しているということ。例として、川へのポイ捨てなどがあてはまる。それは対策として皆へ呼びかけること。これは、「水を守ること」に当てはまる。

私は、「水を守ること」もとても大切だが、「水を作ること」もとても大切であると考えている。小学五年生の社会で「植林」について知ってから、私はそれに興味をもち、学校のインターネットで調べてみると、次のような事が分かった。水が森をつくり、森が水をつくる。つまり、「水⇕森」なのだ。簡単に言うと、森の木は水をあげて育つ。そして森にしみこんだ雨水は、土できれいな水になり、地下水となる。すなわちこの

森は、「緑のダム」なのだ。このダムのおかげで水が飲めると言っても過言ではないだろう。

しかし、この星は今、木や林、森を進んで切っていないだろうか。そのせいで二酸化炭素が増え、この星の人々がとても困っているのではないだろうか。森の木を沢山切っているいろいろな便利なものが増えたが、その分水が減り、争いがおこっていないだろうか。この問題は、世界で考えなければならぬのだ。

水がなければ、人は何日かで死んでしまう。水は人にとつての「二つめの命」なのではないか。ここ岩手は水に恵まれていて、だからお米がおいしい。でも、もう水不足は始まっている。このままではいずれ水はなくなる。だから、水と人間、そして他の動物や植物のためにもっと水に感謝し、水を守り、つくらなければならぬのではないか。

そして私は学校の周りをまたグルグル走った後水が飲みたいという衝動に駆られた。そしてそれに感謝しながらゴクゴクと飲んだ。

(注) 原文のまま浄書しています

佳作（岩手県知事賞）

災害と水のかかわり

盛岡市立飯岡中学校

二年 佐藤 里桜さとう りお

「水」について考えたのは、最近のことだった。

私は「水」と聞くと、雨や水の災害を思いうかべる。

川が氾濫して家が全壊などの話は、テレビのニュースや新聞では聞いたことがあった。しかし、自分が住んでいる地域で特別な大雨などを経験したことがなかった。あまり実感がもてず、いつも聞き流す程度だった。

今まで、特に興味を持つこともなく、何気なく聞き流していた水の災害についてニュースを今は、真剣に見るようになった。そのようになったきっかけは、二〇十三年の八月九日の大雨だ。

私が住んでいる盛岡ではその日、百二十一ミリもの雨が降った。岩手県内では、平年の八月の降水量をこ

えた地域もあった。当時小学生だった私は雨が特にひどいその時間、地域の児童館に居た。児童館の先生方は、安全のために私達の家に電話し、家族に迎えにくるようにたのんでくださった。しかし、しばらく待っても迎えに来た家の人は、なかなか児童館に入ることができなかった。建物近くの道路沿いの川が増水し、近くにあった切つてある木が車道の方まで流されてきていた。川の水も道路まであふれてしまっていたので、車も水につかるような状態で通るのに時間がかかっていたらしい。ようやく迎えに来た祖父と、私も帰る時にその道路を通つたのだが、今まで見たこともない勢いの強さに、「流されるのではないか。」という不安な気持ちで車の窓から道路の水を見ていた。

家に帰ってテレビをつけると、自分が思っていた以上にひどい被害だということがわかった。あちこちで風で屋根がはぎとばされたり、木が倒れていたりして、けが人などがでるのではないかと心配になった。

次の日に外に出てみると、私の家の前の道路は大き

な被害はなかった。しかし祖父と車で近くを回ってみると、道路に泥や石などがある場所があった。早く起きた祖父は、外の様子を一足先に見てきていて、朝はもっとひどかったことを聞いた。また、いつも遊んでいた湧き水が流れる公園に行ってみると、いつもきれいな湧き水は泥でにごっており、落ち葉がたくさんつまって流れが悪くなっていた。その水は数日たっても、なかなか元のようきれいな水には戻らなかった。私の家の被害は、重ねていたダンボールが飛ばされる程度だったが、友達の家では床下まで水が入ってきたところもあったことをあとで聞いた。また、県内ではこの雨のせいで亡くなった人がいたことも知った。

私はたった一度の雨で、家が壊れたり、亡くなってしまう人がでてしまったりと雨の怖さを知った。また、家の周りに流されてきた泥や石で通りにくいときに、近所の人達で協力して片づけているのを見た。みんなで助け合って、片づけても一日ではきれいにはならなかった。それを見て私は、テレビで流れる震災の被災

地のことを思い出した。みんなが助け合うこと、誰かが皆のために動いてくれているから、今の復興につながっている。

この大雨のおかげで、私は水について考えるようになった。もし、「自分の周りから水がなくなったら。」と考えてみると、生きていけないのではないかと思う。植物は枯れてしまおうし、人間にとっても必要不可欠な水がなければ生きていけない。水は地球にとって、なくてはならない大切なものということだ。

しかし、時には私達人間にとって恐ろしいものに変わる。それも突然やってくる。人間は、水と一緒に生きていくために、いつ災害が起きても大丈夫なように対策を考えておくことが大切だ。これからも、雨など水の災害についての情報に目を向けていきたい。

(注) 原文のまま浄書しています

佳作（岩手県知事賞）

大切な水のために自分にできることを

盛岡市立飯岡中学校

二年 中村 茉奈

水道の蛇口をひねるとあたり前のように、水がでてくるといふ日常。私は今まで水に困ったと感じたことはありませんでした。

私の祖母の家は岩泉の松橋にあります。家は急で長く続く坂の上であり、近くには川があります。つい最近までは、山から水をひいていました。山の水は、秋に水がかれてしまったり、冬には凍って水が出ないことが多々あったそうです。

それで生活用水が足りないため、川で洗たくの水を洗いでいたと聞きました。川の水は夏でも冷たく、冬は氷を割って水洗いをしていたそうです。当時の祖母たちの生活で水はとても貴重だったと思います。

川までも三百メートルほどあります。坂の上から川

まで何度も往復したそうです。二キロの重さの洗たく物も水を含むと倍の重さになります。祖母は、

「あのころは本当に、大変だったよ。」

と昔のことを話してくれました。

また祖母の家は酪農もしています。山の水がかれたときは、牛に飲ませるために、バケツで約三十回も川まで往復したそうです。

それはまだ子供だった祖母の仕事だったそうです。今の私にはそんなことはできないとつくづく思いました。

夏に祖母の家に行って川遊びをするときに川底がすけてみえていたことを思い出します。夏でも足を入れると足がびりびりするほど冷たかったです。それ以上に冷たい水で洗たくをしていたことは信じられません。私が小さかったころ祖母の家に遊びに行ったとき一度、山の水がかれて出なくなりお風呂に入ることができなかつたことがありました。

飲み水もなく、近所の方から水を頂いてきてご飯を

作ったり、食器を洗ったりした事がありました。一度だけ経験したことです。とても不便だと思っただけ、それが何度もあつたり何日もあつたかと思うと本当に大変だつたと思うし、正直、嫌だと思います。

しかし、私の祖母の時代はもっと水が足りなくて生活用水だけでなく、飲み水も川の水だつたと聞きました。水がきれいだったので。そんな川にはやまめやいわな、かじかがたくさんいたそうです。今は数が少なくなつたなと祖母は言っていました。

いつまでもきれいな水であつてほしい。私もそう願います。そのためには私たちは何をすればいいのでしょうか。

私の祖父は、自然を大切にしていました。山ではなめこやしいたけなどを栽培していました。また家の周りに広がる畑で野菜を育てたりもしていました。山や自然を大切にしている祖父でした。その祖父が亡くなつてしまい、今、それを受け継ぐ人はいません。私は、とても残念に思います。祖父と同じことはできなくて

も私たち若者がボランティアをして木を植えて育てたり、ゴミ拾いなどをしたりして環境をさらに豊かにしていくことはできるのではないのでしょうか。

まだ、中学生の私には、一人でできることには限界があります。

山にたくさん木を植えたりはできないけれど、今、住んでいる地域のゴミ拾いや雑草とり、毎日の家や学校での節水はすぐできることだと思います。

このように、小さなことからこつこつと取り組み、その努力をつみ重ねることによって少しずつでも変わってくると思います。祖母や祖父から聞いたことを、私は私なりに自分のできることをやることでつないでいきたいと思います。目標をたて、それにむかつてがんばっていききたいです。

(注) 原文のまま浄書しています

佳作（岩手県知事賞）

水はとても大切な資源

花巻市立花巻北中学校

一年 長谷川 遥香

毎日ありまえのように使っている水。食事のとき、お風呂に入るとき、トイレで用を足すときなど水は暮らすのにとっても大切な資源だ。しかし、その水が使えず暮らしに困っている人々はこの地球上にたくさんいる。

私が水について考えるようになったのは、四年ほど前から。東日本大震災があった頃だ。私達の住む花巻市も停電が三日間ほど続いたが、幸い水は止まらなかった。でも、震災後テレビで水が止まり暮らしに困っている人達が紹介されているのを見て、水は人々が暮らすのにとっても大切なものであり、その水が無くなる、とても困ることが分かった。たくさんの人が一滴でも多くの水を使えるように私は節水を心掛けるよう

にしている。

小学校五年生のとき、総合の学習で環境をテーマとした調べ学習があった。そのとき私は、水のことを調べてまとめることにした。水について調べるグループでは世界の水不足や水の汚染度などについて詳しく調べていった。すると、一人あたりの水資源量が少ない国は、エジプトやサウジアラビアだということが分かった。また、学校の近くの川の汚染度を調べてみると、思ったより汚染度が高かった。大きな原因の一つは、川のごみだったのだ。ジュースの缶やおかしの袋などのポイ捨てが多かった。今、私達は、あたりまえのように水を使っているけれど、世界中には水不足や水が汚くてなやんでいる人がたくさんいる。

なぜポイ捨てをした人は、その人達のことを考えずに簡単に物を投げ入れてしまうのか。そう考えると怒りが止まらなかった。この作文を書いているときも、そのことを思い出すだけで悲しく、くやしいような気持ちがあふれ出してきそうになった。私は花巻市内、岩

手県内すべての川の水が、人が飲めるくらいきれいになつたらいいなと思つている。

水不足が解消されること、川や水がきれいになることを願つて、こんな私にも気を付けていることがある。それはなるべく多くの水を使わないこと。節水だ。歯をみがくときに水を出しっぱなしにしないことはもちろん、他にもお風呂に入るときシャワーをあまり使わない、洗たくするときはお風呂の残つたお湯も使うなど、常に家族みんなで節水を心掛けている。夏になると、私の家ではキュウリやトマトなどの野菜を毎年育てるようにしている。そのとき、水道水を使わずに米をといだときにでるとぎ汁を使って、私の家では水やりをする。米のとぎ汁には栄養がたくさんあるので野菜の成長にもいいし、何回も水を使わなくていいので節水にもなる。このように、私の家でもコツコツと節水が続けている。でも、まだまだできることがたくさんありそうなので、他にもどのようなことができるか、考えていきたいと思う。

ある資料に、「水は年々減つている」と書かれていた。「水不足」それは今、世界中で問題となつていいる環境問題の一つだ。私は、世界中の人々がより多くの水を使えるようにできることを見つけ、実践していきたいと思つている。

(注) 原文のまま浄書しています

佳作（岩手県知事賞）

水のありがたさ

盛岡市立飯岡中学校

三年 藤原 玲奈

私の家は、農家をしている。家の周りは田んぼに囲まれ、畑もある。

小学生だったころ、夏の夜のほんの数日、私はちょっと変わった光景を見かけた。田んぼや草むらに、小さな青白い光を見つけたのだ。今ではめっきり見かけなくなった蛍だ。それを見つけてすかさず私は声をあげる。「蛍だ。」そんな私の声にピクリともせず、蛍はただただ光り続ける。

私をもっと小さかったころ、夏の夜、よく祖父と兄と三人で家の周りの蛍を見に行った。その光景はまるで花火のようで、たくさんの蛍が光っては消え、飛んでぶつかり合って……。自分が夢の中にいるような感覚になった。そして、祖父と私は蛍を見に行くと必

ず歌を歌った。「ホ・ホ・ホタル来い。あっちの水はにがいぞ。こっちの水はあまいぞ。ホ・ホタル来い。」歌を歌うとホタルが近くに来てくれるかもしれないと思っただけだ。私と祖父の歌が蛍に届いたのか不思議と蛍が私達の周りに集まってきた。その姿に私はひたすら目を輝かせた。

田んぼのすぐそばには、田んぼに水をいれるための小川がある。数年前までは、土手があって、雨が降れば川はあふれ、田んぼにたくさん水が入ってしまった。逆に水の量が少なすぎてもダメと聞く。そのため、田んぼに多くの水が入りすぎてしまった時には、祖父が水をせき止めに行っていた。しかし祖父も年をとり、田んぼの水を止めに行くのを忘れることがよくあった。そんな時、土手を工事して、水の流れをよくするとう話がもちあがった。その時私は自分達がおいしいお米を食べられればいい。祖父の負担が少しでも減ればいい。と自分達のことしか考えていなかったのだ。祖父に、「工事したらもう蛍は見られないかもしれない

い。」そう言われた。私は「なぜ？」と心の中で言った。工事から数年たった今、あれから蛍はかなり減った。数年前まではたくさん飛んでいた蛍の光が今はどこか寂しげにポツリポツリと光を放っている。

この光を見て、私はやっと気付いたのだ。あのとき祖父が言った意味に。工事をする事で、環境がよくなったはずなのに、なぜ蛍が消えてしまったのか。蛍は小川や草むらなど自然のきれいな川でしか生息できない。つまり、人間の手によって人口的に作られた川には、蛍の居場所がないのだと。居場所がなくなった蛍は、死んでいくしかないのだと。

水は、地球に生きている生き物にとってなくてはならないものだ。人間だけではない。動物や植物も水の力によって生きることができると。ま夏の暑い時期に飲む冷たい水は、私たちを生き返らせてくれる。水が止まってしまえば食事にも困るし、お風呂にだって入れない。一日の生活が困難になってくる。ふと気付いた時、当たり前のように私たちの身近な所に水があ

るのだ。その水を、私たち人間の都合だけで、使ってしまったのではないだろうか。

水は生き物全てにとって必要なものだ。しかし、私達人間は自分たちの勝手な都合で、知らず知らずのうちに他の生き物の居場所を奪い、生活していくのが困難な状態にしてしまっているのだ。蛍を通して「水」のありがたさや、今のこの環境を守ることの必要性を考えさせられた。

祖父は知っていたのだろう。昔の人たちが、暮らしの中で身につけてきた知恵を、私たちがもっと知るところで、自然にとっても、人間にとっても、いい暮らし方や水とのかかわり方を考えていきたいと感じた。蛍が住むことのできる故郷の水を守るためにも。

(注) 原文のまま浄書しています

佳作（岩手県知事賞）

命のみなもと

岩手県立一関第一高等学校付属中学校

三年 渡邊 わたなべ ありん

「地球は青かった」

だれもが一度は聞いたことのある言葉だろう。人類で初めて宇宙飛行をしたソビエトの軍人、ユーリ・ガガーリンの言葉だ。彼の言う地球の青の正体は、紛れもなく水である。表面が水に覆われていることから、地球は水の惑星と称される。このように、宇宙から見た地球は、水が豊かな生命の星なのだ。しかし、地球に住む私たちから見た地球はどうだろう。果たして、水の惑星と言えるのだろうか。

地球にある使用可能な水の量を考えてみよう。地球の青のほとんどは海水であり、生活用水として使用できる淡水ではない。仮に地球上の水を湯船一杯分と考えると、そのうち淡水はなんと両手ですくえる量より

も少ないのだ。さらに、その少ない淡水の三分の二は北極地域などの氷であり、水として川や湖沼に存在しているのは三分の一でしかない。しかも、その分布には偏りがあり、水が足りず健康的な生活のできない地域もあれば、水が有り余っていて無駄に使う地域もあるのが現状だ。

日本はどちらに当てはまるのだろうか。まず、一人当たりの水資源量を見てみよう。日本は、一位のアイスランドと比べると約百分の一、世界平均だと半分以下だ。このことだけを見ると、日本は水不足の国ということになる。しかし私たちは、普段そのような不便はあまり感じていない。その原因は何だろう。それは、パーチャルウォーターだ。パーチャルウォーターとは、輸入品を生産するためにどの程度の水が必要か推定する考え方だ。日本の食糧自給率は約四十パーセントで半分以上の食料を輸入に頼っている。食料を生産するためには水が必要であるため、日本は水も大量に輸入していることになる。日本では、国内で食料生産のた

めに使われた水の量よりもバーチャルウォーターの方が多く、その量は世界一とも言われている。つまり、日本は間接的にはあるが水を大量に輸入することによって、豊かな生活が成り立っているのだ。

そんなこととはつゆ知らず、水なんていくらでも出ると、無駄に蛇口をひねっている私たちがいる。私自身、シャワーを流しっぱなしにする、コップに水を汲むのはいいが、飲みきれずに流すといったことをしている一人であるが、皆さんも私のように水を無駄にしているだろうか。

ガガリンが目の当たりにした地球は、確かに青かったに違いない。しかし、それを私たちが壊しているのだ。これ以上悪化させてはならない。そのためにまず、ひとつのことを心に留めよう。それは「水と命はひとつつながり」ということだ。いま水を流しっぱなしにすれば、同時にその分だけ命も流れている。そう考えれば、自然と意識が変わるはずだ。

水と命のつながりは、宇宙が教えてくれる。土星の

衛星エンケラドスには水があることが確認されている。そのことから、高い可能性で生命が存在するらしい。ただそこに水がある、というだけで生命が存在する可能性が出てくる。だから、水と生命はイコールで結びつけることができるのだ。

私の夢は、天文学者になることだ。理由は、宇宙が好きだから。地球も大好きだ。小学校に上がるときに両親がくれた、小さな小さなプラネタリウム。幼い私は、部屋の壁に映し出される星空に思いを馳せた。たぶん、私の夢はここから始まったのだと思う。先人たちが守ってきた地球、水、そして命。今度は私たちが受け継いでいく番だ。次の世代に、夢を与えられる。宇宙の魅力を、地球の美しさを伝えられる。それを、そのまた次の世代にも、いつまでも受けついでいける。そんな未来にするために、地球の青を守りぬこう。

(注) 原文のまま浄書しています